

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実



「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」とは？

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が求められている背景とは？

児童生徒が、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、「学びの過程」を一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す方向で質的に改善していくことが不可欠です。

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」とは、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して、急速に変化し続けるこれからの時代に求められる資質・能力の育成を、多様な特性を有する全ての児童生徒に対して実現しようとする際の改善の視点です（図1）。つまり、それは「主体的・対話的で深い学び」の実現を支える学びの在り方と言えます。

その達成には、教師による児童生徒の丁寧な見取りや、内容や時間のまとまりを見通した授業づくりを通じた学習過程と学習環境の丁寧な設計等、様々な点において、児童生徒の一人一人の学習状況を見取りながら支援を行う教師の専門性が重要となります。

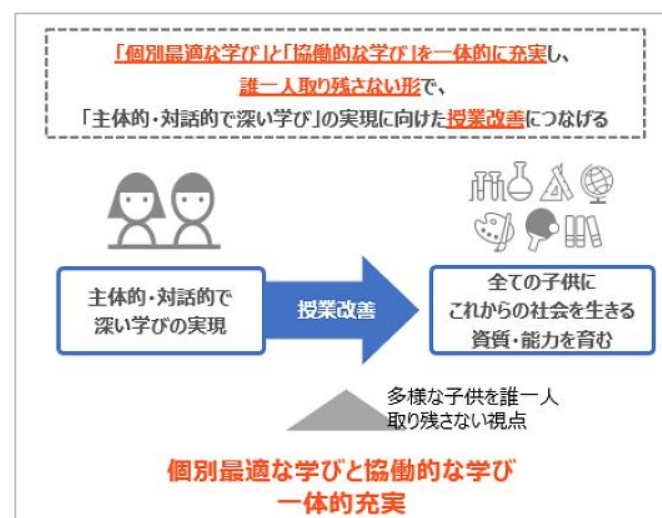


図1 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のためのサポートマガジン『みるみる』」より



「個別最適な学び」とは？

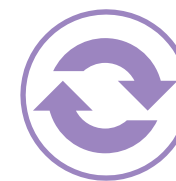
一人一人の児童生徒の特性や学習状況に応じて学習活動や支援を工夫し、全ての児童生徒の資質・能力の育成を目指す学びです。

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた資質・能力の育成を、誰一人取り残さず全ての児童生徒に実現できるようにしていくための視点が、「個別最適な学び」であると言えます。



「協働的な学び」とは？

多様な他者との対話や協働を通して、多面的な見方・考え方を働かせながら学びを広げたり深めたりする学びの在り方です。また、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥ることがないよう一体的に充実していくことが重要です。例えば、一人一人ですぐ場面でも、意図的に協働的な場面を設けることや、協働的な場面でも、一人一人の学びが深まるような工夫を行うことなどが考えられます。



「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を進めるために

授業づくりにおいては、教科等の特質や児童生徒の実情を踏まえながら、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要です（図2）。



図2 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のイメージ図

■単元（題材）全体で考えること

授業づくりを行う際は、「主体的・対話的で深い学び」と同じように、1単位時間の授業の中に全ての学びを取り入れようとするのではなく、単元（題材）という一定のまとまりの中で実現していくことが重要です。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の双方を経験できるように、単元（題材）を構想することがポイントです（図3）。

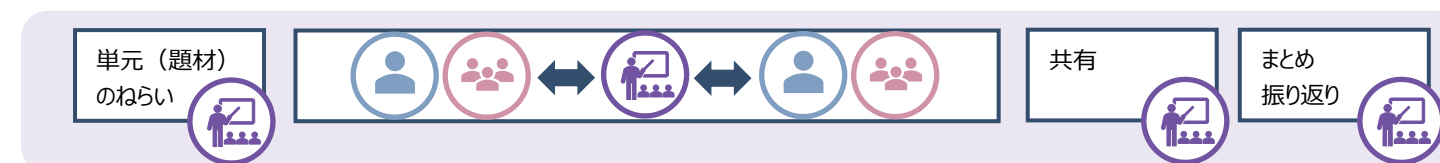


図3 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を進めるための単元（題材）のイメージ図（例）

■「個別」「協働」「全体」の学びを効果的に組み合わせること

単元（題材）をデザインする際は、単元（題材）の目標を達成するための児童生徒一人一人の学びの過程を見通し、「個別」に学習を進める場面、「協働」が必要な場面、「全体」に指導する場面を、それぞれの学びがもつ役割やよさを生かしながら組み合わせることがポイントです。その際、その組合せが児童生徒の学びの質を高めたり、資質・能力の育成につなげたりするように構成することが大切です。

また、教師が「個別」「協働」「全体」の学びを組み合わせるだけでなく、児童生徒が必要に応じて、一人で考えたり、他者と対話したり、全体で共有しながら学びを深めたりするなどして、自らの学び方を選択できるようにしていくことも大切です。

■児童生徒の学びを支える手段としてICTを効果的に活用すること

ICT環境は、多様な児童生徒一人一人に応じた学びを支える手段として重要な学習基盤です。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を進めるに当たっては、児童生徒自身が主体的に学びを調整し、必要に応じて個別に学んだり、他者と協働したりできる環境をいかに整えるかという視点がとても大切です。そのためには、教師がICT環境を整えとともに、児童生徒がその学びの目的や状況に応じてICTを効果的に活用し、自らの学び方を調整したり選択したりできるようにすることがポイントです。